KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

地域日本語教育の日本人参加者の対話活動に対する重要性の捉え方：
対話活動の重要性の捉え方による目的、楽しさ、難しさの異なり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-10 キーワード (Ja): 地域日本語教育, 対話活動の目的, 対話活動の深度, 日本人参加者 キーワード (En): 作成者: 友宗, 朋美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学非常勤
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000337

地域日本語教育の日本人参加者の対話活動に対する重要性の捉え方
ー対話活動の重要性の捉え方による目的、楽しさ、難しさの異なりー

友宗　朋美

要旨

地域日本語教育の場において、対話活動が提唱されて久しい。本稿では、地域日本語教育の活動に参加している日本人参加者を対象に実施したアンケート調査の回答をデータとし、対話活動のテーマや重要性を感じる理由などから、対話活動の目的や対話活動の重要性、また、その重要性の捉え方により感じる楽しさや難しさの異なりを調査した。その結果、対話活動を「最も重要である」と捉える記述と「重要である」と捉える記述には対話の目的や深度の異なりがあることや、多様な楽しさがある一方で、難しさは重要性の捉え方により異なることも明らかになった。本結果から、日本人参加者の対話活動の捉え方には深度があり、その深度に合わせた働きかけが必要なこと、難しさを避けるのではなく、楽しさと難しさの両方を実感しながら対話を紡ぐ経験を積み重ねることが、ともに暮らす社会づくりを目的とした地域日本語教育の活動には重要であることを主張した。

【キーワード】 地域日本語教育、対話活動の目的、対話活動の深度、日本人参加者

1. はじめに

日本の中長期在留者数と特別永住者数を合わせた在留外国人数は年々増加傾向にあり、2022 年末には初めて 300 万人を超え、過去最高を更新した（法務省 2022）。日本の少子高齢化や労働力減少が進む中、日本で働き暮らす外国人の増加傾向は続くと思われる。細川（2019, pp.68-69）は、多様な文化的言語的背景を持つ人々がともに暮らす地域社会の創造において、言語教育に必要なことは「個人一人ひとりが、ことばによる活動を軸に、他者を受け止め、テーマのある議論を展開できるような場（共同体）

を形成すること、あるいはそのような意識を持つ実践活動」であり、「価値観の異なる多様な他者との関係において、ことばによって自己を表現するとともに、その他者を理解し、ともに住みよい社会をつくっていくこととそのための意識改革」が肝要であると述べている。そして、そのためには対話による人と人の理解と合意が不可欠だと主張している。日本人住民と外国人住民が同じ住民という立場でやりとりをおこなう場として「地域日本語教育」がある。この地域日本語教育において、かつては日本人が教え、外国人が学ぶといった一方向の活動が主流であったが、2000 年代前後から参加者全員がフラットな関係でやりとりをおこない、交流や相互理解を促進する対話活動や、地域の課題をともに考える双方向の対話活動への転換が提唱されている（御舘 2019 ほか）。筆者も、地域日本語教育の対話活動は、対話による人と人との理解が深められ、よりよい社会を作っていく場として重要な役割を果たすと考えている。

2. 地域日本語教育における対話活動の先行研究

地域日本語教育において対話活動の重要性が主張されるようになり、対話活動に関する論考も多く見られるようになってきた。御舘（2013, p.5）は、地域日本語教育の「対話中心の活動」を「外国人参加者と日本人参加者（ボランティア）が対等な関係のもとで、（主に）日本語を用いたコミュニケーションをし、その過程で人間関係を築き、共に学び、変わっていくことのできる活動」と定義し、人間関係構築や共に学び、変わっていくことの重要性を主張している。友宗（2022）は、地域日本語教育の活動において「対話」がキーワードとして言及されている 2000 年以降の論考を概観している。そして、論考で述べられている対話の目的には、「人間関係づくり・居場所づくりなどの安心感や他者とのつながりを目指す活動」や「生活や地域にある課題を共有し解決を目指す活動」などがあり、複数の理論・理念が存在していると述べている（p.172）。このように、「対話」を含む活動の論考を概観すると、さまざまな理念や定義が見られるが、実際に地域日本語教育の場で活動をしている日本語が母語の参加者（以下、日本人参加者）は、対話活動に対してどのような意識を持ち、対話活動をどのように捉え、実施しているのだろうか。

3. 地域日本語教育の対話活動に対する日本人参加者の意識

対話活動が促進されるようになり、地域日本語教育に関わる日本人参加者への講座

や研修も対話活動の導入を促進させるための内容に変化した（俵山ほか 2017）。ただ、双方向の対話活動が提唱されている一方で、現在も一方向の文型積み上げ式の活動をおこなっている団体も多く（飯野 2019; 福村・三代 2021）、対話活動を促進するには適切なサポートが必要である。対話活動の導入や継続の難しさに関しては、田中（2018）や横田（2014）の調査がある。田中（2018）は対話活動を促す講座に参加した日本人参加者にインタビューをおこない、扱うテーマや教材選定・加工のためのスキルや時間の不足、対話中のとっさの対応への困難さ、文法中心の活動と比較した焦点の不明瞭さなどを感じ、取り入れない選択をするという日本人参加者の対話活動に対する志向を述べている。横田（2014）では、実際に対話活動に参加した日本人参加者にアンケート調査を実施し、「言いたいことが話せる」「色々な人に出会えるのが面白い」といった肯定的な意見もある一方で、「ただのおしゃべりの場だった」などの否定的な意見も見られ、対話活動の継続には「ただのおしゃべり」にならないための働きかけなどが重要であると主張している。

対話活動の講座や研修が広くおこなわれるようになってきた昨今、対話活動に対する意識も変化していることが示唆される。対話活動の目的をどのように捉えているのか、そして、対話活動の重要性の異なりにより、対話活動の捉え方は変化するのかどうかを調査することは、対話活動の導入・継続を促し、どのような働きかけが有効であるかを示す際に寄与することができると考える。

4. 本調査の目的

地域日本語教育の場において双方向の対話活動を実施し、外国人住民と日本人住民が相互理解を深め、地域社会の変革および変革への意識改革を促進し、ともに住みよい社会の構築へと寄与することは重要である。現在、対話活動の導入・継続を促進するための日本人参加者を対象とした講座や研修がおこなわれているが、そのような場で活用できる対話活動の具体的な意義や可能性を示すこと、対話活動実施時に感じる難しさへの働きかけなどを示すことは極めて有効であると考える。

そこで本調査では、地域日本語教育の活動に参加している日本人参加者の意識に着目し、対話活動について、どのようなテーマをどのような意図でおこなっているのかを調査する。そして、どのような理由で対話活動の重要性を捉えており、その捉え方により楽しさおよび難しさなどは異なるのかを明らかにする。

5. 調査方法とデータの概要

地域日本語教育の活動に参加している日本人参加者を対象に 2023 年 3 月から 6 月にかけて紙媒体と Google forms を利用してアンケート調査を実施した。地域日本語教育の団体を所管している教育委員会や団体の運営者らに協力を依頼し、承諾を得た施設に紙媒体および Google forms の URL でアンケートを送付し、回答を得た。本稿では、回収した紙媒体の回答 71 名分、Google forms の回答 114 名分を合わせて 185 名分の回答をデータとして扱う。倫理的配慮として、研究の趣旨やデータの取り扱いに関して文書にて説明し、得られたデータは個人が特定できない形で学術利用することに同意を得ている。なお、本調査ではアンケート調査という手法を用いるが、日本人参加者の意識を探るため自由記述の項目を多く設けることで、できる限り一人一人の意識を把握できるような設計で実施した。

次に、調査概要を示すために、回答者の地域（表 1）と年代（表 2）をまとめた。回答者の地域にばらつきがある理由は、筆者が依頼可能な教育委員会や団体の運営者らにおこなったためである。また、年齢に関しては本調査では 60 代以上が 68%を占めるが、文化庁（2022）の「年代による業務別の日本語教師等の数」（表 3）においても、不明を除いた数を見ると地域日本語教育の場で活動する人の割合は 60 代以上が 60%と最も多く、その他の年代も大きな相違はないと思われ、本調査の結果は日本人参加者への働きかけにおいてある程度有効なデータであると考える。

表 1　回答者の地域別人数

地域	回答者数	地域	回答者数	計
大阪府	143 (77%)	茨城県	6 (3%)	185 (100%)
兵庫県	35 (19%)	無記入	1 (1%)	

表 2　回答者の年代別人数

年代	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代～	計
回答者 (%)	0 (0%)	6 (3%)	6 (3%)	15 (8%)	33 (18%)	125 (68%)	185 (100%)

表 3　年代による業務別の日本語教師等の数（文化庁 2022）

年代	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代～	不明	計
ボランティアの人数 (%)	26600 (1%)	100900 (5%)	70700 (3%)	158000 (7%)	268500 (12%)	934700 (43%)	597400 (28%)	2156800 (100%)
不明を除いた%	2%	6%	5%	10%	17%	60%	N/A	100%

6. 結果と考察

6.1 対話活動実施の有無と対話活動のテーマ

まず、対話活動実施の有無について、「活動中、 漢字や語彙・文法などではなく、学習者の方と自由に話をする機会がありますか」という質問の選択式の回答を調査した（表 4)。その結果、「毎回ある」「時々ある」の回答は 185 名中 178（96%）であった。「その他」には自由記述ができるように設定しており、そこには「毎回ある人もいれば、全くしない人もいます。相手によります」「学習者によっては喜ばない人もいた。話し好きな人とは話がはずむ」という回答があった。

表 4　「対話活動実施の有無」の回答

対話活動の機会の有無	回答者数(%)	対話活動の機会の有無	回答者数(%)	計
毎回ある	160 (86%)	全くない	1 (1%)	185 (100%)
時々ある	18 (10%)	無記入	2 (1%)	
ほとんどない	2 (1%)	その他	2 (1%)	

次に、対話活動の具体的な内容を探るために、対話活動時のテーマの選択について分析した。「活動中に学習者の方と自由に話をするときに、よく選んでいるテーマを 3 つ書いてください。例：週末の話、趣味、仕事の話、学習者が困っている話など。また、そのテーマを選択している理由があればお書きください」という質問に対する自由記述を読み込み、KH Coder で頻出度を確認した。KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計をおこなった結果、185 の段落、283 の文が確認された。また、総抽出語数は 4514、異なり語数は 682 であった。これらの頻出語の上位 30 語とその出現頻度を示す（表 5)。

また、KWIC コンコーダンスのコマンドを用いて具体的なテーマとして考えられる 3 番目以降に頻出回数が多い「仕事」「困る」「趣味」「生活」「週末」などのそれぞれの語がどのような文脈で使用されているかも確認し、テーマとそのテーマの選択の理由を探った。その結果、「仕事」の文脈では、「仕事の話を通じて生活について情報が得られるから」「ほとんどの学習者が仕事を持っているため」などの理由が挙げられていた。さらに、「困る」の文脈では「困っている話を聞く。助言できればする」「日本人にはわからない外国人からの視点を知るため」、「趣味」では、「好きなことを話題にすると楽しく会話が出来るため」などの記述があり、困りごとやお互いの生活や興味・関心を知るためのテーマが多く選択されていることがわかった。なお、このテーマの分

析結果から、日常生活や趣味など個人に関わる経験や習慣、また仕事や生活での困りごとなどについてやりとりされていることが読み取れることから、本アンケートで使用した表現「自由に話をする活動」は、本稿の 2 章で述べた「対話活動」と概ね一致していると言える。

表 5　「対話のテーマ選択とその理由」の自由記述における頻出語

頻出語	出現回数	頻出語	頻出回数	頻出語	頻出回数
話	173	話題	25	知る	12
学習者	79	国	21	内容	12
仕事	63	文化	19	日常	12
困る	44	思う	16	違い	11
趣味	42	食べ物	15	会話	11
生活	42	テーマ	15	季節	11
週末	35	学校	14	楽しい	10
日本	35	聞く	14	健康	10
話す	32	日本語	13	子供	10
家族	28	多い	12	出来事	10

6.2 対話活動の重要性とその理由

本節では、回答者の対話活動に対する重要性とその理由について述べる。「地域日本語教育で、自由に話をする活動を取り入れることは重要だと感じていらっしゃいますか」という質問に対する「最も重要である」「重要である」「あまり重要ではない」「わからない」「その他」から 1 つ選択する選択式の回答を分析した。その結果、28%の回答者が「最も重要である」、65%の回答者が「重要である」と感じていることがわかった（表 6）。

表 6　「対話活動の重要性」の回答

対話活動の重要性	回答者数(%)	対話活動の重要性	回答者数(%)	計
最も重要である	52 (28%)	わからない	4 (2%)	185 (100%)
重要である	120 (65%)	その他	2 (1%)	
あまり重要ではない	2 (1%)	無記入	5 (3%)	

一方で、「あまり重要ではない」「わからない」「その他」を選択した自由記述には「相談を受けたときは別だが、あまり深入りしないほうがいいと思う。感情を害すること

があるかもしれないので」「自由な会話はある程度レベルの日本語ができないと難しい」などがあった。このことから、対話活動にはとっさの対応が求められること、ある程度体系的な日本語を習得してからでないと自由会話ができないという日本人参加者のビリーフ、日本語を調整しながら話すことへの難しさなどが読み取れ、対話活動の重要性を低く感じている日本人参加者の存在も明らかになった。

次に、対話活動の重要性に対する理由を分析する。先述した「地域日本語教育で、自由に話をする活動を取り入れることは重要だと感じていらっしゃいますか」に続く質問項目「そのように答えられた理由をお書きください」に対する自由記述を読み込み、テキストマイニングを用いたアンケート解析（共起ネットワーク分析および対応分析）をおこなった。テキストマイニングは、コンピューターによってテキスト型ないしは文章型のデータから自動的にデータを抽出（形態素解析）した後、さまざまな統計手法を用いた分析をおこなうことでパターンやルールが発見でき、データを整理、分析、理解することができる（樋口 2020）。

テキストマイニングの分析には、KH Coder を用いた。KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計をおこなった結果、185 の段落、248 の文が確認された。また、総抽出語数は 4437、異なり語数は 718 であった。分析にあたって、まず、重要性に対する理由の記述を KH Coder の共起ネットワークを用いて共起関係を探った。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークのことである（樋口 2020）。KH Coder の出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を 5、最小出現数を 1 に設定し、上位 60 で作成した。その結果を図 1 に示す。共起ネットワークの図は、共起の程度が強いほど線が太くなり、出現頻度が高い語の円が大きく描写されるため、内容の把握が容易となる。なお、以下の分析の記述では、筆者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを【】、記述に見られた語彙および自由記述の引用を「」、出現回数を（）内の数字で示す。

以下では、図1で示した語の共起関係とKWICコンコーダンスの検索結果をもとに、対話活動の重要性に対する理由について、筆者が特徴的なまとまりであると判断したものを、【①日本語を自由に話せる場だから】、【②学校とは異なる交流の場だから】、【③日本人と日本語を話す機会が少ないから】、【④お互いを知り、理解することが大切だから】、【⑤試験の勉強ではなくコミュニケーション能力を養う場だから】の 5 つを項目として立ててまとめる。

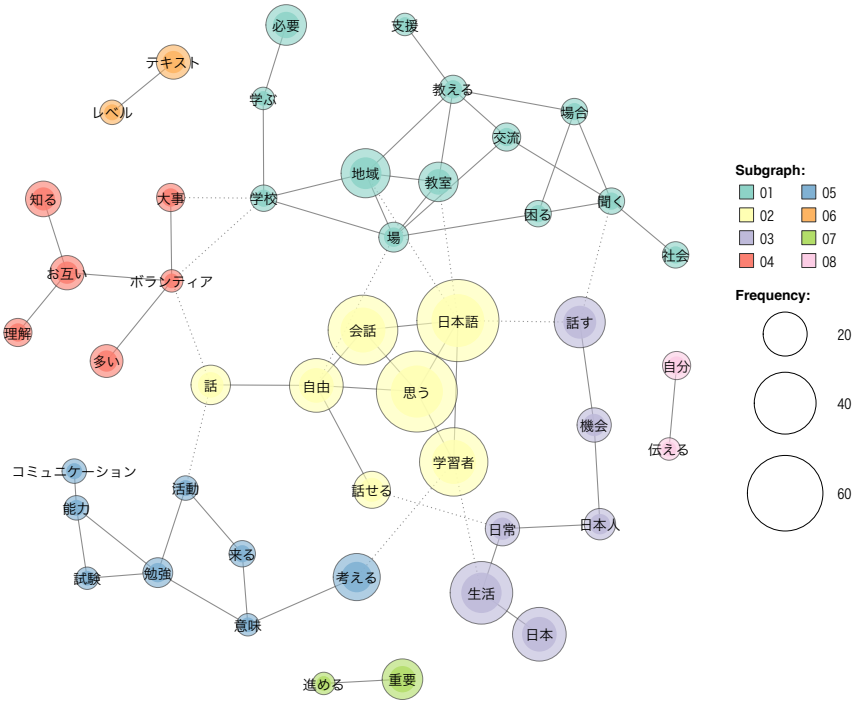

図 1　「対話活動の重要性に対する理由」の自由記述の共起ネットワーク

【①日本語を自由に話せる場だから】: 図 1 の中心のサブグラフには、「会話（51)」「自由（30)」や「話せる（14)」などの語が確認できる。KWIC コンコーダンスでこれらの語が使用されている文脈を検索した結果、「テキストも大切ですが、生活に密着するのは自由な会話ではないかと思うから」「学習者が希望する内容が最も重要だが、自由な会話の中から、楽しさが見つかる」などの記述が見られ、地域日本語教育の場を自由に話せる場として認識している日本人参加者が多いことがわかった。さらに、中央に位置していることおよび共起の程度を示す線が他のサブカテゴリーとつながっていることから、他の記述とも関連していることが理解できる。

【②学校とは異なる交流の場だから】: 右上のサブカテゴリーを見ると、「交流（8)」「教える（8)」「学校（7)」「困る（7)」「社会（7)」などが見られた。文脈を確認すると、「自由に話をすることでより仲が深まると思うし、そうなることで生活の困りごとなどの相談もしやすいと思うから」「語学教室との違いの最たるもの。言葉のキャッチボールは、私たちの教室だからできること」などの記述があり、日本語学校との特徴

の異なりも認識し、地域日本語教育の場を「交流の場」や「困りごとなどを相談できる場」などと捉えていることが示唆される。

また、近年、地域日本語教育の対話活動の議論では、「教える－教えられる」の関係性の構築に問題があると批判されることが多い。そこで、本カテゴリーで出現した「教える（8）」は「対話活動の重要性に対する理由」ではどのような文脈で表れているかを確認した結果、両者の視点の記述が見られた。まず、「日本語を教える教わる関係より、人としての交流を深められると思うので」「「教える」「教えられる」の上下関係ではなく、対等な立場で心の交流ができて初めて打ち解けて話ができるので」という「教える」活動を否定的に捉えている記述があった。一方で、「地域のボランティア教室では、生活言語としての日本語を教えることが多いので、日常会話ができるようになることが一つの目標だから」「地域日本語教室は日本語を教えることと同じくらい、学習者がその土地に馴染めるようにすることが大切だと考えます」という日本語を「教える」活動とも認識している記述も 2 件見られた。このことから、「教える－教えられる」ではない関係性を構築しようという日本人参加者と、日常会話を「教える」ことも目的の 1 つだと捉えている日本人参加者の両者の存在が読み取れる。後者の「教える」活動と捉えている記述が 2 件のみであることから、「交流」や「教える－教えられる」ではない関係性の構築に重きを置いている記述の方が多いが、「教える」ことへの認識もあることがわかった。

【③日本人と日本語を話す機会が少ないから】: 右下のサブグラフには「日常（12）」「生活（41）」「話す（27）」「機会（12）」「日本人（10）」といった語が見られた。記述を見ると「学習者によっては、自由に話せる機会が日常生活でなかなかないと思うから」「テキストをなぞるだけでなく、地域で暮らしやすくなるためには日常会話は大切だと考えます」などの記述があった。このような記述から自由に話せる場の提供や、日常会話を日本語でおこない生活で必要な日本語運用能力を高めるといった目的への意識が読み取れる。外国人参加者の話す機会、特に「日本語」を話す、「日本人」と話す機会の少なさを感じ、対話活動の重要性を認識していると理解できる。

【④お互いを知り、理解することが大切だから】: 左中央のサブグラフでは「知る（13）」「お互い（12）」「理解（8）」「ボランティア（5）」といった語が多く見られた。記述を見ると、「地域ボランティアは学校とは違い、お互いが協力して学ぶ・学びを支えるという点で、お互いのことを知るのは大事だと思う」「お互いの生活や個人的なことにつ

いて少し話をして分かり合うことで、よりよく学習者を支えることができると思う」などの記述が見られた。つまり、地域日本語教育は、言語知識を学ぶ場ではなく、参加者同士がお互いについて話すことで相互理解を深めたり、必要な支援や行動を考えたりする場であることを意識していることが理解できる。

【⑤試験の勉強ではなくコミュニケーション能力を養う場だから】: 右下のサブグラフには「勉強（9)」「コミュニケーション（6)」「能力（6)」「試験（5)」といった語が見られる。記述には「周りの人とコミュニケーションをとれることが、日本で生活していくうえで、とても大切だと考えるため」「ある程度話せる学習者の方にとっては、自由に話をする活動は日々勉強していることをブラッシュアップする意味でとても良い練習になると思う」などがあった。一方で、対話を重要だと述べつつも「事情により試験勉強をみっちりとしたい学習者の場合は、その希望を優先しても良いと思います」という記述もあり、外国人参加者の希望に合わせる形で活動内容を決めているケースも見られた。しかし、これは外国人参加者の生活に直面している課題であり、必要な支援であるともいえる。現在、日本人参加者向けの講座や研修が多くおこなわれているが（俵山ほか 2017)、対話活動促進には両者への働きかけも重要であろう。

次に、重要性の選択肢により異なりがあるかを調査するために対応分析をおこなった。対応分析は、原点（0,0）付近にどこにでも出現する特徴を持たない語が集まるのに対して、原点から離れたところにはそれぞれの部分に特に多く出現する語の特徴を読み取ることができる（樋口 2020)。本調査では、対話活動に対する重要性に関して「そのように答えられた理由をお書きください」の質問に対する自由記述の内容と、対話活動に対する重要性の選択肢（外部変数）との対応分析の結果から、重要性の捉え方による自由記述内容に異なりがあるかを検討した（図 2)。対応分析の結果、「最も重要である」のより近いところに出現している語を見ると、「交流」「地域」「試験」「勉強」などが確認できた。また、「重要である」の自由記述に特徴的な語として見られる語は、「楽しい」「お互い」「知る」などがあることがわかった。

さらに、重要性の捉え方による自由記述内容の異なりの詳細を把握するために、「最も重要である」の回答の特徴的な語「交流」「地域」「社会」「試験」が表れている文脈を KWIC コンコーダンスで検索した。その結果の一例を引用して示す。なお、特徴的な語として出現している語には筆者が下線を追記している。

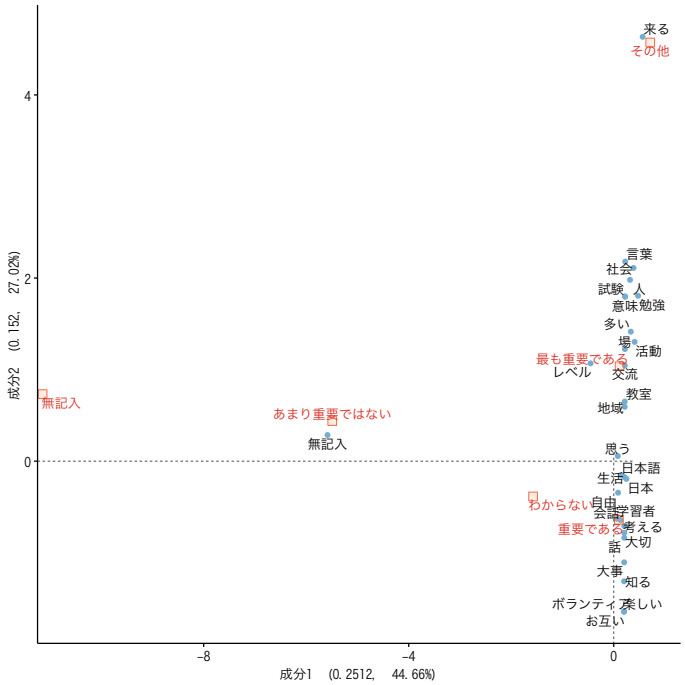

図 2　「対話活動の重要性の理由」と「対話活動の重要性」の対応分析

- そもそも回答者のいる教室は「日本語交流教室」であり、日本語を使って自由な会話をしたりするのが最も教室の設置趣旨と合致するものだと思います。また、そのような「交流」の中から、外国人の皆さんが困っている事柄等を地域住民が聞きとり、その場で解決することができたり（例：彼らにとって意味不明な郵便物等を受け取った場合）、関連する社会資源を教えることなどがあるとともに、地域住民自身が彼らの困難から今後の地域社会のあるべき姿を考える手がかりをえることができるからです。
- 語学教室との違いの最たるもの。言葉のキャッチボールは、私たちの教室だからできること。
- 聞いて話す、話して意思を疎通させる意欲と機会を重ねることが、生活を成り立たせ、社会参加を可能にするために最も必要であり、言語学習の上でも有効であると考えている。また、支援者がよりよい支援方法を柔軟に考えて実践するために不可欠だと考えている。

- 試験や仕事でなく、間違ってもいいから自由に思っていることを話せる場であるから。

一方で、「重要である」を選択した回答にみられた特徴語である「楽しい」「お互い」「知る」の自由記述を見ると、以下の記述が見られた。

- 文法や読み書きばかりだと集中力が続かない方もおり、自由に話すことで楽しさややる気を引き出せるように思う。
- お互いの文化や習慣の違いを知り、理解し合う事が大切だと思うから

この対応分析で見られた特徴的な語を中心に「最も重要である」「重要である」の自由記述の異なりを考察する。まず、「最も重要である」の特徴として見られた語から、地域日本語教育は「学校」ではなく「地域」だからこその「交流」ができる場としての対話活動という捉え方が影響していることが示唆される。さらに、特徴語と共起している語を見ると「社会資源」「社会参加」「心の交流」などの語も挙げられており、対話活動を社会参加や居場所と関連させて捉えていることが理解できる。一方で、「重要である」の記述に関しては、「楽しい雰囲気」「興味を継続させる」という意図で重要性を感じている記述もあり、対話活動を単に楽しむための表面的なおしゃべりとして認識している場合もあることも読み取れる。他にも、「テキストからばかりだと、マンネリ感が生じて、興味が続きにくい」などの記述もあり、テキストの休憩として対話活動を実施しているケースも考えられる。つまり、対話活動の重要性およびその理由の捉え方の異なりは、対話の目的およびその目的の深度が影響していると理解することができる。「最も重要である」と回答した日本人参加者は、より「学校ではない交流の場」や「地域社会とのつながり」に重きをおいた対話活動の重要性を感じており、「重要である」の回答者は対話活動を「楽しさ」や「お互いを知る」という対話活動の中でも表面的な視点で捉えている傾向があると主張できる。

6.3 対話活動の楽しさ

本節では、対話活動の楽しさに着目して調査する。質問項目「活動中、学習者の方と自由に話をする際に、楽しいと感じられることはありますか。どのような時に楽しいと感じられますか」に対する自由記述の回答を読み込み、KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計をおこなった結果、185 の段落、259 の文が確認された。また、総抽出語数は 3847、異なり語数は 648 であった。次に、KH Coder の共起ネット

ワークのコマンドを用いて作成した図を示す（図 3）。

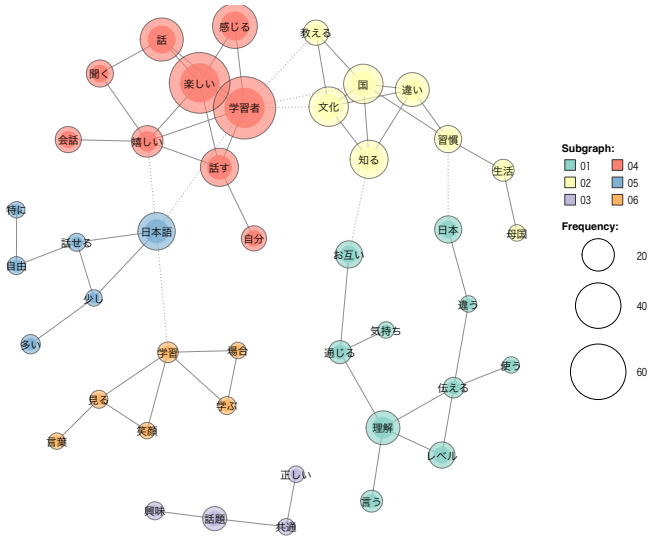

図 3　「対話活動の楽しさ」の自由記述の共起ネットワーク

以下では、図 3 に示した語の共起関係をもとに筆者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを、【①国の文化や習慣を教えてもらう時】、【②話した内容が理解でき、お互いに気持ちが通じた時】、【③外国人参加者が日本語を少しでも話せるようになった時】、【④外国人参加者の笑顔を見る時】、【⑤共通した趣味や興味について話している時】の 5 つの項目として立て述べる。

【①国の文化や習慣を教えてもらう時】: 右上のサブグラフを見ると、「国（30）」「文化（30）」「知る（28）」「違い（22）」などの語が見られることがわかる。KWIC コンコーダンスで文脈を検索すると、「色々な話題について話しますが、国による違いもあれば、共感するところもあり、色々知れるところが楽しいと思います」「学習者の国の話を聞くと、異なる文化を知ることができるので世界が広がり楽しい」など、文化や習慣について話し、違いについて理解することが日本人参加者の学びにもなっており、楽しんでいることが読み取れる。

【②話した内容が理解でき、お互いに気持ちが通じた時】: 左下のサブグラフには、「お互い（14）」「通じる（10）」「伝える（8）」「気持ち（5）」といった語のまとまりが見られる。文脈を確認すると、「お互いに本音で語り合うことで出会いの喜びがある」

「学習者のレベルが違っても、言いたい事柄を一生けん命伝えようと工夫しながらお互い努力して、何とか理解出来て気持ちが通じたとき」などの記述があった。このことから、一方向ではなく、お互いに意思疎通をするために努力し、理解が深まっていく過程に楽しさを感じていることがわかる。

【③外国人参加者が日本語を少しでも話せるようになった時】: 左中央のサブグラフには、「日本語（27)」「自由（6)」「話せる（6)」「少し（5)」などの語のまとまりがある。自由記述を確認すると、出現回数が 27 件と多かった「日本語」の捉え方においては、外国人参加者の「日本語」に対する記述と、日本人参加者の「日本語」に対する記述が見られた。前者は、外国人参加者の日本語能力の習得に関する記述である。例えば、「学習者が正しい日本語を話せた時」「少しでも覚えていてくれて日本語が話せるようになってると嬉しい」など、外国人参加者の日本語の会話能力に着目し、その能力を評価する立場から捉えた記述が 12 件あった。一方、後者は、日本人参加者の日本語に関する気づきや、コミュニケーションのあり方について言及している記述である。例えば、「日本語の使い方で、学習者が迷っている所があれば、その理由、解決法を掴めた時」「私も多くの外国語を学習していますが、日本語を学ぶ時に母国影響から間違える場合、自分も外国語を学ぶ問題点として気付く場合があり、とても参考になり楽しい」などの記述は、外国語を学ぶ際の難しさと解決への気づきや日本語と外国語との違いについて言及しているものである。3 件のみであったが、ここから、日本人参加者も「日本語」について改めて考えていることが示唆される。

【④外国人参加者の笑顔を見る時】: 左側の中央下に見られるサブグラフには、「学習（8)」「見る（6)」「言葉（5)」「笑顔（5)」などの語のまとまりがある。自由記述には、「ゼロ初級の方であっても言語によらないコミュニケーションが成立したり、絵を描いたりスマホの画像映像等を通して意思疎通できたときにはお互い笑顔となりとても楽しく感じる」「学習者の方が笑顔になった時。わからなくてつまずいた時に、その後理解できて会話が通じた時」「少しの時間でも楽しみながら日本語の学習ができている様子を見ていると私も楽しくなります」などが見られた。このことから、対話活動時には、特に楽しさや嬉しさの感情の共有をすることで、日本人参加者は対話活動の楽しさを実感していることが読み取れる。

【⑤共通した趣味や興味について話している時】: 下のサブグラフには「話題（11)」「興味（6)」「共通（5)」などのまとまりが見られた。文脈を見ると、「子育てなどで共

感する話題」「会話の中で共通の関心事が見つかったときは楽しいと感じます」などの記述があった。共通点を発見し、その話題について話すことで、感情を共有することに楽しさを感じていることが理解できる。

なお、対話活動の重要性の捉え方の影響との関連性を探るために重要性の選択肢を外部変数とした対応分析もおこなったが、大きな差は見られなかった。

ここで、楽しさに関する記述の分析結果をまとめ、考察する。まず、対話活動の重要性に関して対応分析をおこなったが、特徴的な語が見られなかったことから、日本人参加者の対話活動の重要性の捉え方が楽しさに与える影響は少なく、それぞれが多様な楽しみ方をしていることが示唆される。特徴的なまとまり別で見ると、【①国の文化や習慣を教えてもらう時】の記述からは、対話を通して相手の習慣や経験、考えを聞き、新たな知識として受け入れている様子が読み取れ、日本人参加者は新たな知識を得、学びの実感に楽しさを見出していることが理解できる。さらに、【②話した内容が理解でき、お互いに気持ちが通じた時】、【④外国人参加者の笑顔を見る時】、【⑤共通した趣味や興味について話している時】などからは、コミュニケーションを紡ぐ中で相手の表情や気持ちを感じとりながら対話を楽しみ、展開させていることがわかる。話す内容だけではなく、感情の共有や共通点の発見も楽しさを感じる上では重要な要素である。

一方で、【③外国人参加者が日本語を少しでも話せるようになった時】の記述には、日本人参加者の外国人参加者への日本語運用能力向上に対する意欲や評価が見られ、「教えるー教えられる」の「教える」立場で対話をしている記述も見られた。詳しくは 6.4 節で後述するが、外国人参加者の日本語能力向上に注目することで、非対称な関係性の構築につながりうる危険性もあり、この楽しさへの認識には、慎重に働きかける必要があると考える。

6.4 対話活動の難しさ

本節では、対話活動の難しさについて述べる。質問項目「活動中、学習者の方と自由に話をする際に、難しいと感じられることはありますか。どのような時に難しいと感じられますか」に対する自由記述の回答を読み込み、KH Coder を用いて前処理を実行した。文章の単純集計をおこなった結果、185 の段落、259 の文が確認された。また、総抽出語数は 4086、異なり語数は 754 であった。

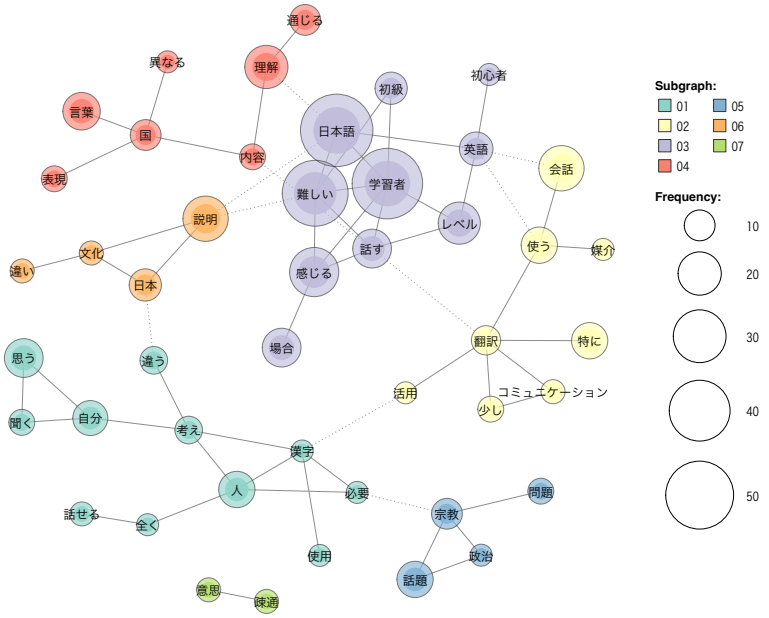

図 4　「対話活動の難しさ」の自由記述の共起ネットワーク

次に、KH Coder の共起ネットワークのコマンドを用いて作成した図を示す（図 4）。

以下では、図 4 に示した語の共起関係をもとに、筆者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを、【①日本語でコミュニケーションができない時】、【②日本語や文化を説明する時】、【③媒介語や翻訳を使用する時】、【④政治や宗教の話題の扱い方】、【⑤国によって言葉や表現が異なる時】の 5 つの項目として立て述べる。

【①日本語でコミュニケーションができない時】：中央部分のサブグラフには、「日本語（57）」「学習者（54）」「難しい（47）」「レベル（19）」「初級（11）」「初心者（5）」などの語が見られ、そしてこれらの語はそれぞれのサブグラフにつながっていることがわかる。これらの語が使用されている文脈を見ると、「日本語をほとんど話せない方との意思疎通」「初心者レベルだと上手く言葉が出てこず、沈黙してしまう時がある。こちらもなかなか話題を繋げないことがあり難しい」「私が話す内容を理解しているのか、確認できないレベルの方との会話では不安しかありません」などの記述があった。日本人参加者が感じている難しさで最も多く挙げられていたのは、日本語でコミュニケーションができない時であり、特に日本語を習いはじめたばかりの外国人参加者と対話をおこなう際に難しさを感じていることが読み取れる。

【②日本語や文化を説明する時】：左側中央のサブグラフには、「説明（22）」「日本

（11)」「文化（6)」「違い（6)」という語が見られ、「日本語（57)」とも共起関係が強いことも読み取れる。これらの語が使用されている文脈を見ると、「文法的なこと、同じような意味の言い方の違いなどなんと説明したら良いのかが難しい」「日本の文化や制度について、「なぜ」と聞かれたときに、説明に困ります」「学習者の国にない習慣や感覚、法律の違いにより、説明のしようがなかったり、難しい言葉で長い説明をしないと誤解を生む事柄だったりする場合、難しさを感じます」などの記述が見られた。日本語のニュアンスや文法、文化や制度、習慣や感覚などの説明が求められ、それらを説明する際に難しさを感じていることが読み取れる。

【③媒介語や翻訳を使用する時】: 右側中央のサブグラフには、「会話（22)」「使う（14)」「翻訳（9)」「媒介（5)」などの語が見られた。文脈を見ると、媒介語や翻訳使用の捉え方には 4 つの視点があることが確認できた。1 つ目は、翻訳機を使ってもコミュニケーションが取れない時の難しさや、日本人参加者の媒体語使用への難しさを感じている記述である。例えば、「やはり、翻訳機を使っても話す内容が伝わらないときに難しいと感じます」「語彙を伝える時。学習者さんのレベルによっては説明が伝わりづらく、英語を使ったりしてしまう」などが挙げられていた。2 つ目は、外国人参加者の媒介語使用について言及している記述である。「学習者が媒介語でこちらに伝えようとすること」「学習者が日本語での会話に焦れて、つい英語を使ってしまう事」などの記述が見られた。3 つ目には、媒介語や翻訳機の使用に対する肯定的な意見「日本語だけでのコミュニケーションがうまく取れないと感じた時には、翻訳機やスマホを活用するので特に感じたことはありません」などが見られた。そして 4 つ目は、葛藤を感じている記述である。「現在の外国人児童に日本語を支援する場合、媒介語を使ってもよいと聞き、その態勢ではじめたのですが、良くなかったのではと思っています。どうしても媒介語に傾くので」という記述があった。翻訳機の使用に関する記述から、難しさを感じている日本人参加者は多いことが確認できたが、媒介語や翻訳の使用は対話活動の目的をどう設定するかにより是非の感じ方も異なると考えられる。参加者同士で目的に応じた使い方、その目的別の使用の是非について話し合う機会を設けることも、対話活動の再考には有効であると考える。

【④政治や宗教の話題の扱い方】: 右下のサブグラフには、「話題（14)」「宗教（10)」「問題（7)」「政治（5)」などの語が出現している。自由記述には「宗教的な問題や戦争などが話題になった時」「政治や宗教などの話題には気を付ける」などがあった。さ

らに、「政治や宗教に関する話題はできるだけ触れないように気をつけています」「宗教的な面に触れないようにすること」など、宗教や政治の話題をあえて避けているという記述も見られた。政治や宗教の話題を避けるというのは、楽しい雰囲気の対話を目的とする場合や、限られた時間内で対話をおこなう場合はやむをえないのかもしれない。しかし、相手をより深く知るための対話をおこなうには、合意には至らなくても政治や宗教など個人の考え方や価値観に影響を与えうるテーマに関して、難しさを十分理解したうえで言語を通して表現し合うことは重要な話題であると考える。

【⑤国によって言葉や表現が異なる時】：左上のサブグラフには、「理解（20)」「国（10)」「表現（7)」「異なる（5)」などの語が見られた。文脈を見ると、「学習者さんの国にある表現が日本語にはない時」「日本語の表現（言葉）がその国の言葉で当てはまらない時」など特有の表現の説明や外国人参加者に理解してもらうことに難しさを感じていることが読み取れる。さらに、「日本独特の伝統行事についての説明で、どこまで理解されたのか不明な時」「お互いに文化、習慣の違いがなかなか理解できない。しかし、通じた時は楽しい」という記述もあり、対話相手の理解度が把握できない時、相手に理解してもらえない時などにも難しさを感じていることがわかる。この理解し合えない難しさは、楽しさの【②話した内容が理解でき、お互いに気持ちが通じた時】とも共通する点であると考えられる。つまり、日本人参加者は、対話時にコミュニケーションの難しさを感じながらも、試行錯誤しながら対峙している外国人参加者との間でどの程度共通理解が深められたかを対話により認識しながら、理解できない難しさと、深まる楽しさの経験を重ねているのである。

さらに、対話活動の重要性の選択肢により感じている難しさに異なりがあるかを調査するために対応分析をおこなったところ、図 5 の結果が見られた。

詳細を調査するために、KWIC コンコーダンスの検索結果を以下に引用して示す。まず、「最も重要である」の回答者の特徴的な語「文化」「学習」「説明」「違う」「考え」「媒介」が表れている文脈を確認すると、以下のような記述が挙げられていた。

- 日本の文化・宗教などテーマが難しくなった時、日本語のみでは共通理解に達することができない時がある。その時、大概英語により補完説明するとわかってもらえる時がある。
- 何かアドバイスをするときに、本人の考えが違うと思っても、尊重しなければいけない。

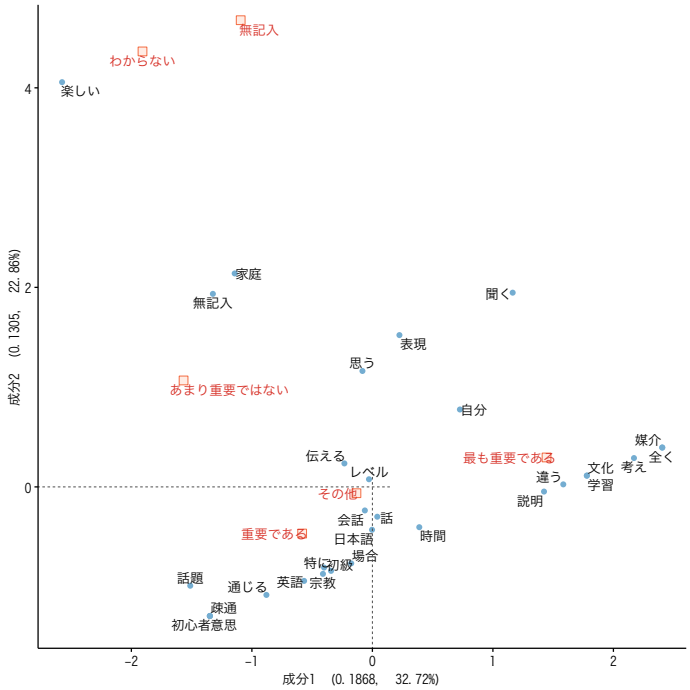

図 5　「対話活動の重要性」の対応分析

- 学習者の国にない習慣や感覚、法律の違いにより、説明のしようがなかったり、難しい言葉で長い説明をしないと誤解を生む事柄だったりする場合、難しさを感じます。
- 現在の外国人児童に日本語を支援する場合、媒介語を使ってもよいと聞き、その態勢ではじめたのですが、良くなかったのではと思っています。どうしても媒介語に傾くので。

他にも、「最も重要である」を選択した回答には以下のような記述も見られた。

- 異文化コミュニケーションのスキルが未熟と自身が感じる時だ。基本傾聴する姿勢で臨むことが大事だと感じているが、「どう思いますか。」と尋ねられた時に、自分の意見を相手にどう伝えるか悩む瞬間がある。
- こちらの勉強不足で上手く説明出来無い時。

次に、「重要である」と回答した日本人参加者の自由記述の中で特徴的な語として見られた語「宗教」「意思疎通」「英語」「初心者」「日本語」などを含む自由記述を引用して示す。

- 政治と宗教になった時(基本的には触れない)
- 初心者レベルだと上手く言葉が出てこず、沈黙してしまう時がある。こちらもなかなか話題を繋げないことがあり難しい。
- 特に初心者の方は、日本語で自分の思うことが伝えられないとすぐに英語に頼ってしまうので、日本語で会話を続けるのは難しいです。

ここで、「最も重要である」と「重要である」の特徴的な語とそれらの語が使用されている文脈を比較して考察すると、どの程度踏み込んだ対話をするかということが異なる点であると考えられる。「最も重要である」の回答の記述からは、難しいと感じる政治や宗教の話題についても踏み込み、異なる考えに対する説明を試みながらも、実際に共通理解に至る難しさを実感していることが読み取れる。つまり、相手との距離や相手の受け止め方にも考慮しながら向き合い、しっかりと理解してもらえるように心がけている意識の存在が示唆される。さらに、「最も重要である」と回答した記述には、例えば、上記の翻訳に関する記述「その態勢ではじめたのですが、良くなかったのではと思っています」や「こちらの勉強不足」、「異文化コミュニケーションのスキルが未熟と自身が感じる」からは、対話活動の中で外国人参加者と向き合いながら自身のコミュニケーションのあり方を内省する場面があることが理解できる。一方で、「重要である」の記述を見ると、「宗教」や「政治」のテーマ、「英語」の使用を避けた方がいいと捉える記述や、「初心者」とのやりとりの難しさなどに言語的な側面に着目した記述が特徴として確認できた。このことから、対話活動の重要性や目的の捉え方により、対話活動で扱うテーマや踏み込む深度、媒介語や翻訳機を使用して意思疎通のために説明を補完するか、あるいは媒介語を使用しないコミュニケーションを求めるかなどに異なりがあることが示唆される。

筆者は、この難しさに対して、難しさを避ける対話をおこなうのではなく、難しさと向き合い、この難しさにはどのような意義があるかという視点で対話活動を捉えるかが鍵になると考える。例えば、【①日本語でコミュニケーションができない時】、【②日本語や文化を説明する時】、【⑤国によって言葉や表現が異なる時】に関して、この難しさは相互理解を深める対話には不可欠である。義永（2015）は、「日本人による日本語の学び直し」の重要性を主張している。非母語話者の日本語学習者がいくら日本語を一生懸命勉強し、習得したとしても、母語話者の側も学び、自身の話し方を捉え直し、新しい形でコミュニケーションを協働でつくっていくという姿勢が「つながる

こと」には不可欠であると述べ、日本語母語話者が「日本語」を捉え直す必要性について論じている。つまり、筆者は、日本人参加者が難しさとして挙げていたこれら①②⑤のまとまりに関して、この難しさを感じること自体に意義があるのではないかと主張する。相手のことばや表現の方法を理解し、伝わるように何度も言い換えたりしながら、そして、共通認識に至ることができる「日本語」を含めたことばを使用しながらコミュニケーションをとることこそが、異なる言語的・文化的背景を持つ人同士のコミュニケーション、そして「ひと」と「ひと」の関係性を深めるには重要である。さらに、義永（2015, p.38）は「『正しいのか、正しくないのか』『わかるのか、わからないのか』といった評価をいったん保留し、まずはそのまま受け入れ、『完全に通じなくてもいい』と言える環境をつくることが重要」であると述べている。つまり、地域日本語教育の対話活動においても、「日本語」にこだわらず、また母語話者が評価することのない対話ができる場の創造が必要であり、地域日本語教育がこのような場として機能することで、人間関係の構築や居場所づくり、さらには地域社会をつくっていく過程に寄与できる意義となり得ると主張する。

また、【③媒介語や翻訳を使用する時】や【④政治や宗教の話題の扱い方】に関しても、対話活動の目的や意義を再考することで、どのように扱うべきかがより具体的に見えてくると考える。まず、【④政治や宗教の話題の扱い方】に関して、名嶋（2022, pp.233-234）は、「さまざまな異なるローカル」が「いま、ここ」を「ともに生きる」社会をつくるには、異論や複数性、政治性についての対話が必要だと主張している。そして、日常生活に直結している「日常の政治性」（ジェンダー、教育格差など）について語り、相手の意見を「ともに生きる他者の声」として尊重しながら聞き、社会に働きかけられるような活動を一人一人がおこなうことが重要だと述べている。筆者も、多様な他者が集まる地域日本語教育の活動の場ではある程度の関係性を構築した上での対話が可能であることから、「異論」を生むテーマで相互理解を深め、多様な視点を獲得し、ともに生きる社会の創造につなげられる可能性を保持しており、地域日本語教育の対話活動に適していると主張する。さらに、この外国人住民の視点で語られた社会的課題を地域日本語教育の場に留めておくのではなく、より多くの地域住民と議論し、意識改革や行動につなげていくことは、ともに暮らすよりよい社会の形成のためには肝要であるといえる。この視点を考慮すると、【③媒介語や翻訳を使用する時】に関しても、テーマの対話の中で相互理解を深めるために、相手の本音を聞いたり、

現在習得していることばで表現したりするのが難しい場合は、媒介語や翻訳を使用することも必要であろう。対話活動の目的を明確にすることで、媒介語や翻訳の使用に関してもより深く議論できると考える。

7. 総合的考察

まず、対話活動の重要性や難しさにおいては、「最も重要である」と「重要である」の対応分析をおこなったことで、対話活動の捉え方には異なりがあり、対話活動への目的の認識や理解の深さの度合いに異なりがあることが明らかになった。対話活動が重要だと主張され久しいが、実際に活動している日本人参加者がなぜ重要だと感じているかにも深度があり、その深度に合わせて働きかけを調整していくことを再考すべきである。対話活動の促進には、日本人参加者が対話活動の重要性や意義を多方面から検討し、ともに住みよい社会をつくっていくためには、どのような目的を持ち対話活動を導入・実施するかを十分に議論することが重要である。

さらに、実際に対話活動をおこなっている日本人参加者の楽しさと難しさの双方を照らし合わせて考察したことで、楽しさと難しさの両方の経験を重ねることが重要であることがわかった。つまり、意思疎通ができない歯痒さを感じながらも、言語を調整し、対話を続け、理解し合うことが、対話活動には肝要である。特に、難しさに関しては、対話活動の難しさを回避するための対応策を考えればいいということではなく、日本人参加者が感じる難しさにも意義があり、その難しさと向き合うことも重要である。例えば、本調査で明らかになった楽しさや難しさについて議論することで、対話活動の目的を細分化し、外国人参加者との関係性や対話活動の深度に合わせてテーマやツールを考えることができるのではないかと考える。対話活動の目的を明確にし、対話活動による楽しさや難しさの経験の積み重ねることは、「ひと」と「ひと」との関係性を築き、相互理解を深め、ともに社会的課題やその解決への行動を考え、住みよい社会を作っていく上で重要な経験であることを主張する。

8. まとめ

本稿では、地域日本語教育の活動に参加している日本人参加者に対するアンケート調査を分析することで、対話活動の具体的なテーマや重要性の捉え方および理由を明らかにし、対話活動の意義や可能性を示すことができた。また、対応分析をおこなう

ことで、対話分析を「最も重要である」と認識する参加者と「重要である」と認識する参加者の対話活動の目的や深度が異なることも示すことができた。近年、対話活動の重要性が主張されてきたが、重要性の異なりにも着目することで、さらに深い解釈を示すことができた。

ここで、本調査結果の実践への還元の可能性について述べる。まず、対話活動の導入を検討している日本人参加者に向けての講座や研修をおこなう場合は、研修実施者が参加者に重要性の理由や楽しさの分析結果や具体的な記述を共有することで、対話活動の意義の理解を深めることが有効であると考える。さらに、対話を深めるには、感情の共有も重要な要素であった。そこで、例えば学生同士や子育て経験者同士など、共通点があるグループで活動をおこなうことで、さら多くの参加者と感情を共有し、関係性を築きながら、個人の考えや経験を伝え合うことで、テーマをさらに掘り下げることもできると考える。あるいは、対話活動を実施しているが目的が不明瞭だと感じていたり、対話を深めることに難しさや疑問を感じている日本人参加者に対しては、深度を深めた対話活動の意義を示すことや、難しさとして出てきたカテゴリーや自由記述を共有することも有効である。参加者間で本調査カテゴリーや自由記述に対して考えや実践を共有することでお互いの対話活動の目的や可能性への認識を深めたり、難しさにどのように対応できるかを検討したりすることも可能となるであろう。

ただし、本調査結果はアンケート調査の分析によるものであり、重要性の捉え方に合わせた活動が実践の場でおこなわれているかまでは判断できない。本調査の結果を踏まえ、どのような目的や認識のもとで実際の対話活動がおこなわれているか、インタビューや参与観察の手法も用いた分析も必要である。また、「ともに住みよい社会の形成」を目指す対話活動には、外国人参加者の対話活動への認識も調査し、双方の視点を踏まえ検討することが肝要である。今後は外国人参加者の声も聞き取り、ともに住みよい社会の形成を目指す対話活動のあり方を丁寧に模索していきたい。

参考文献

飯野令子（2019）「日本語ボランティアと研究者が共に歩む地域日本語教育へーボランティア日本語教室の新たな価値を創造するー」『常磐大学人間科学部紀要 人間科学』37(1), 1-14.

御舘久里恵（2013）『地域日本語教室における「対話中心の活動」の意義と効果に関

する研究』平成 23～24 年度科学研究費助成事業（No.23720266）研究報告書
御舘久里恵（2019）「地域日本語教育に関わる人材の育成」『日本語教育』172, 3-17.
田中真寿美（2018）「地域日本語教室支援者の「対話型」活動に対する意識」『青森中央学院大学研究紀要』29, 45-55.
俵山雄司，渡部真由美，田中真寿美（2017）「地域日本語教育における日本語ボランティアの養成・研修講座の内容の変遷－文化庁事業の平成 20 年度と平成 25 年度の取組の比較を通して－」『名古屋大学日本語・日本文化論集』24, 45-59.
友宗朋美（2022）「「地域日本語教育」 における対話活動 : 理論・理念および活動目的・内容の相違点に着目して」『関西外国語大学留学生別科』32, 163–177.
名嶋義直（2022）「民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える―「対話」 を積み上げるための「異論」「複数性」「政治性」―」稲垣みどり，細川英雄，金泰明，杉本篤史（編）『共生社会のためのことばの教育』明石書店, 199-239.
樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析 第 2 版―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシヤ出版
福村真紀子，三代純平（2021）「公共日本語教育のための実践研究官学民による 「親子 de 国際交流」プロジェクト」『東京外国語大学国際日本学研究』1, 103-118.
文化庁（2022）『令和 4 年度日本語教育実態調査―国内の日本語教育の概要―』https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongo/nihongo_120/pdf/93919401_06.pdf（2024 年 11 月 28 日）
法務省（2022）在留外国人統計（2022 年 12 月末現在）https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=24101212&tclass1=000001060399&result_back=1&cycle_facet=tclass1&tclass2val=0&metadata=1&data=1（2024 年 11 月 28 日）
細川英雄（2019）「日本社会と異文化間教育のあるべき姿」西山教行，大木充（編）『グローバル化のなかの異文化間教育−異文化間能力の考察と文脈化の試み』明石書店, 55-70.
横田隆志（2014）「地域日本語教育における交流型日本語活動についての評価－白山市国際交流サロンでの活動から－」『北陸大学紀要』37, 231-243.
義永美央子（2015）「日本語教育と「やさしさ」－日本人による日本語の学び直し－」義永未央子，山下仁（編）『ことばの「やさしさ」とは何か－批判的社会言語学からのアプローチ－』三元社, 19-43.